

随想

高校教育の現場から

沼畑 早苗

お茶大地理学教室のアカデミックアシスタントを5年間務めさせていただきました。この4月からは、浦安市内にある大学付属高校の非常勤講師を専業としています。

受け持ちは、高3の選択地理が週2コマ、高1の倫理が12コマの計14コマです。地理学科出身者が倫理を教えるの？と驚かれるかもしれませんが、何を隠そう昨年度は日本史も教えました。これは、ある意味、地理を専門に学んだ高校教員を取り巻く現状を端的に表していると思います。

この高校の場合、1年で倫理と政経、2年で世界史、3年で日本史を全員が履修するカリキュラムが組まれており、残念ながら、地理は、3年の選択科目で開講されるのみです。選択科目も、英語・現代文・古典・数学・情報・物理・化学・生物・政経・世界史・日本史・地理の12科目の中から2科目を選択する仕組みなので、地理を学ぶ生徒は、学年の1割に満たないのが現状です。

そして、地理を選択した生徒にとっては、少なくとも3年ぶり（付属中学出身者は5年ぶり）の学習であり、大学に地理学科はないので、ほぼ全員が学校で地理を学ぶ最後の機会となります。地理を選んだ理由を聞くと、「地図を見るのが楽しいから」といった前向きな答えだけでなく、「英語も国語も歴史も（もちろん数学も理科も）苦手だから、やったことがない地理にした」と漏らす生徒もいて、思わず唖然としますが、この際理由は何でも構いません。

かつてに比べ、中学校までの段階で世界地理の取り扱いが減少していることもあり、高校3年生の地理選択者といっても、4月の段階では、世界に関する知識はないに等しい生徒が大半です。まずは何も見ず、世界地図を描くことから始めます。ヒントなしに、大ま

かでも5大陸を描くことができる生徒は、当初2割といたるところ。「日本と5大陸は必ず描いてね」、「5大陸って何だっけ？」、といったやり取りの末、団子状の大陸が描かれていきます。この状況から始めて、高3の通常授業が終わる12月までに、世界の国名などを含む「頭の中の地図＝メンタルマップ」を育成し、大学生・社会人になっても恥ずかしくない基礎的な地理知識をつけて卒業させることが目標です。

大学付属高校なので、8割の生徒が6月には進学先が決定します。その後のモチベーションを維持させるためには、一にも二にも生徒を飽きさせないことが大切です。退屈だと思われようものなら、たちまち視聴率が下がります。体育会系の生徒が多いので、スポーツの話題を切り口にしたり、作業を取り入れたり、短い映像を見せたり、手を替え品を替え工夫しています。

昨夏の甲子園優勝校は、朝5時から夜10時まで練習しているとのことでしたが、本校も大会前は同様です。明らかに疲労している生徒たちの前では、こちらの努力が実らないこともあります。

そんなこんなで、全員が当初の目標を達成することは容易ではありませんが、地理は卒業してからも役立つそうだということは、授業を重ねていく上で生徒たち自身が気づいてくれるようです。「地理に詳しい男性はカッコいい」などと言うと、男子比率の高いクラスはさらに盛り上がります。

「高1で地理をやったら、高2の世界史が、あんなに崩壊しなかったかも」と言った生徒がいましたが、本当にその通りだと思います。とはいえ、しがない非常勤の身、カリキュラムを変更する権限などありません。草の根から、地理の楽しさを伝えていくことが今の私の務めであると考えています。

ぬまはた・さなえ

38回生

東海大学付属浦安高等学校 非常勤講師